



日本記者クラブ第26回通常総会記念講演

中国の歴史と情報

～外国情報をめぐり対照的な日本と中国～

陳 舜 臣

1985年5月20日

“外国情報は中国はダメなんです。外国に対してインテレストを持っていない。中華思想と一口で言えばいいんですが、自分たちのあいだが本来の世界で、これ以外は大体野蛮人の世界だと思っているわけですから、興味を持ちません。”(p5)

* * * * *

“現在、中国では近代化問題がありまして、日本の明治維新にならえというのですけれども、明治維新だけではない。その前の長い前奏曲があるんですね。中国がそんなものに関心を持たなかった時に、日本では、幕府の幹部はみな世界情勢を知っていた。そういう大きな相違がありました。”(p6)

* * * * *

“もしもこれがロバート・モリソンでなくてロバート・モリソン号だと分かっていたら、あれほど危機感を持ってやらなかつたのではないか。2人とも助かったのではないかという気も あとからのこととは分かりませんけれども いたします。情報が伝わる過程では、どんな間違いがあるか分からない。”(p7)

今日は中国の歴史と情報について少しお話して、あとのほうで日本と中国の海外情報への対応の違いに触れてみたいと思います。

先ほど応接室での署名の時に「搖木鐸弭金鐸」(木鐸を搖るがして金鐸をやめよ)と書きました。周の時代、何かあると、政府はこれからなになにをする、ということを知らせるわけです。高礼を立てても字が読めないという状態ですから、村に行きまして鐸(鈴)を鳴らして人を集めます。文事を知らせる時には木の鐸で、武事の時は、金(銅)の鐸で、半鐸のようなもので知らせます。これが来ると村の人々は、また徵兵にきたということでびっくりする。つまり、木鐸を盛んに鳴らしてくれ、しかし、金鐸はあまり鳴らさないでほしい、という意味です。

「邸報」の役割

唐や宋の時代の詩文を読みますと、“邸報”という言葉がよく出てきます。たとえば蘇東坡の詩の中にも、座って邸報を読んでいて迂叟のことを語る、というのがあります。蘇東坡は宋の時代の人です。邸報というのは朝廷が何をするかということを書いたもので、大体、人事異動情報が多い。それを見て、長いこと会っていない、科挙の試験で一緒に合格した人が雲南へ行ったとか、今度はどこへ帰ってきた、とかいった消息が分かるわけです。こうした情報でもって詩をつくるということがよくあります。

この邸報の邸という字は、氏の下に1本棒があります。いろいろ言われていますが、とにかく「低い」という意味です。人偏を付けると「低」という字になりますし、「底」になれば、やはり低いという意味ですから、平屋だという解釈もあります。しかし、低いというのは、家が低いではなくて、ランクが低いという意味のようです。何に比べて低いのかというと、「宮殿」つまり天子のいるところに比べて低いということです。宮殿より落ちるのが邸です。

昔の天子は方々を巡回します。泰山に行き封禪を行なう。すなわち封は山の上に土を積んで天の神を祭り、禪は山の下の土を払い地の神をまつる。封禪、これで天地をまつる。どんな天子にもできるわけではなくて、聖天子、天下太平、その当時で彼らが全宇宙と思った

ところを、つつがなく統治している天子に限られます。封禪せよ、と言われて遠慮した天子は何人もいます。

ともかく、そういうふうに天子が宮殿を離れて地方へ行きます。泊まり泊まり行きますが、その時の屋敷が邸なのです。

また、これは都の中にある大名の屋敷をも意味します。ですから、江戸時代の藩邸みたいなものです。「畿内五百里」は、都から500里以内という意味です。里といつても中国の里は時代によって違いますが、約500メートルとしますと、250キロから200キロ以内、これが天子の直轄地で、それ以外のところには大名、諸侯がいるわけです。その諸侯が都に屋敷を持つ、それが邸です。当然、ランクとしては宮殿より低いわけです。

この邸の役目は何か。国もとからきた人々の接待をし、その人たちの安全のために警備をする。そして食事、飲物を提供する。いわば宿屋の役目です。

しかし、もう1つ役目があったはずです。都の状況を国もとに知らせるという役目があった。これは公式の役目ではないでしょうけれども、いま都では誰が勢力を持っている、そいつと結んだほうがいいとか、いまあれと仲良くしているけれども、あれはもうしようがないぞ、とかいったようなことを知らせるのだろうと思います。その邸から出たのが邸報です。

中央の情報を集めて国もとへ

邸は漢の時代に出てきます。それより以前は「館」という字が出てきます。これは同じことです。大名が洛陽の都に持っているものです。各地にもそういうものがありました。孔子が^{さい}鄆という国に行き、昔知り合った館人 館の事務をしている人だろうと思います

が死んだので、自分でそこへ行き中に入って哭す。泣いて、つまり、哀悼の意を表して出てきた。それを弟子の子貢が不満に思う。門弟が死んだ時にもそんなことはあまりしてくれないのにと思って、文句を言ったという話があります。昔、自分と親しかったんだ、と孔子は弁解していますが、どうもそれを読みますと、あんな奴の葬式を行った、と言って弟子が不満に思っているのですから、館人というのはあまり身分が高くない。サービス業なので軽く見られたのか、あるいは

都のことを国もとに知らせるというスパイじみたことが儒教の連中、子貢などにすれば面白くなかったのか、これはよく分かりません。

漢の時代には、もう邸になっています。劉邦が亡くなり、呂后というものすごいオバサンが、劉邦の子供たちを全部殺してしまいます。そして呂后が天下を取るわけです。しかし、呂后が死にますと、周勃という国防大臣が出てきて、4人組を逮捕するようにやっつけてしまいます。劉邦の長男の子と、息子が一人残っている。どちらにしようかということになります。^代だい

いまの雲崗の石仏がある大同市のあたり、この北の辺境の王が唯一残った劉邦の息子です。

呂后にとりまして、自分の子供は一人だけで、これは早く死んでしまいます。あとは全部、自分の旦那のお妾さんの子です。ところが、代の王になっている人は、薄という女性の生んだ子です。薄さんはもともとお妾さんではなくて、お妾さんの腰元でした。ある晩、お上のお召しがきた時に、ちょうどお妾さんは体の具合が悪かった。腰元の薄さんに「代わりに行け」と言うので「それはかなわん」と言うのですが、「お上は酔っぱらっていらっしゃるから分からない。あなた、厚化粧して行け」と言われて行くわけです。お上は、事の終わったあと気がついて、「あ、お前は誰だ」「いや、かくかくしかじか」「あ、そうか。よしよし」というので、それで生まれた子なのです。

だから呂后は、薄さんは恨んでいない。お上が一番可愛がっていた戚夫人は、ものすごい殺され方をするんですけども、薄さんは息子ともども命長らえて、代の王母として無事だったわけです。この代王が呼ばれる。あなたが皇帝にならないとほかになり手がない、と。長男の息子がいるけれども、この母親がまたちょっと悪かった。なにせ呂后のためにひどい目にあってるから、母親とか妻とか、そういう関係が悪いところはダメだということになる。そういうことで選ばれたのが、この代王です。

代王が長安に入る時に、渭水のほとりまで四人組を逮捕した連中が迎えに行きます。皇帝の玉璽（印）を献上する時に、後に文帝となる代王は、「ちょっと待ってくれ。代邸に入ってから相談しよう」と言うわけです。そこには自分の味方ばかりがいる。このことか

らも邸というものの性格がよく分かります。おそらく代邸から代王に情報がいっていると思います。「もう鎮まつたから大丈夫だ」というので、彼は来たと思います。それでも皇帝の印を献上された時に、「ちょっと待ってくれ。邸に入ってから相談しよう」ということになる。

邸の性格は以上のようなものです。前漢、昭帝の元平元年（紀元前74年）の漢書の中に、邸報というのが出てくるのが最初です。中国の新聞史の学者は、ローマ帝国の新聞の一番古いのが紀元前6年だから、それより68年早いと言って喜んでいる。こんなのが喜んだってしようがないのですが（笑い）。

唐代は節度使の情報源

唐の時代になりますと、王の力がだんだん弱くなる。皇族は王になるんですけども、軍隊を持たずに、名目だけということになり、強い節度使というのが出てきます。節度使は最初は9人です。安録山もその1人ですが、これは辺境にあって軍隊を動かせる。もちろん、行政もやっている。唐の時代にはこの節度使の邸ができます。上都邸務留後。唐の時代は長安が都で、洛陽が副都です。洛陽を東都、長安を上都と呼びます。務留後は、後に留めて務めよ、という意味です。たとえば安禄山は遠い北京あたりにいましたから、部下を都の長安に留めて、いろいろなことをやれ、と言うわけです。その連中がいろいろ知らせます。「いま楊貴妃というのがきて、ちょっと困っているんだ」というような知らせがいきます。楊貴妃のいとこと言うへんな奴がきて勢力を持った、これと結べばいいかとか、いろいろな情報を送ります。

しかし、邸の本来の役目は、朝廷のいろいろな詔勅を国もとの節度使に取り次ぐところにあります。今度はこういう法令が出たとか、こういう方針でやるという上意下達。が、節度使にしてみれば、それだけではなくて、都の情報を取りたいということがあります。

これが安禄山の乱のあとに、上都進奏員と名前を変えました。つまり、天子の言葉を取り次いで、節度使の上奏を取り次ぐ、というふうに朝廷側の都合で変えたのですけれども、本質は変わっていないと思います。やはり、都に邸を置くのは、地方の大権力が都の情報

を取るということだったと思います。

唐が滅びて宋になりますと、節度使が大幅に増えます。宋は節度使から出た国ですが、五代の戦乱を切り抜けて皇帝になった趙匡胤（太祖）は、節度使が悪いんだということで節度使を名誉職にしたり、各州につくったりして297人にも増やしました。ですから、都の開封には、297の邸があった。これではどうしようもないというのでその後多くを廃止しまして、唐の時代と同じように、鎮（軍隊のある所）だけに置くということで、三十幾つになりました。

唐の時代の邸報で面白い話があります。詩人の趙壹が家にいますと、みんながやってきて「おめでとう、おめでとう」と言う。邸報にお前が郎中という職に昇進したと出ている、と言うのでいい気持ちになっていたら、それが誤報であったという、そういうエピソードがあります。やはり、昔からそういう誤報はずいぶんあったようです。

では、これを一体どんなふうにして送ったのか。よく分かりませんけれども、敦煌から出して、いま大英博物館にある咸通9年（西暦868年）のものが、現存する一番古い木版の印刷ですが、もちろん、その前からありましたので、おそらく都で木版で刷って多くの国のもとに送ったんだろうと思います。三十何人の進奏員が、みんな自分で印刷した。おそらく、これらの進奏員が同じものを作って、それぞれの国もとへ送っていたのだろうと思います。

宋代に小報、清では日刊の京報

宋の時代の邸報は、大体5日に一度出ています。毎日、法令とか政府の方針が出るのですが、それを5分ためて印刷し、みんなに配るらしい。その事務をしている小吏が、時どきそれをこっそり早く流してしまう。あと4日しなければ出ないのがパッと出てくる。それが「小報」です。これが当時ずいぶん問題になったようですけれども、それだけ情報を欲しがっている人がいたわけです。お金もうけになったのではないかと思いますが、宋の歴史をみると、小報問題というのがよく出てきます。それなら毎日出せばいいのですけれども、そこまでは印刷技術とか、そういうものが進んでいなかったようです。

清の時代には毎日出ました。邸報と言わずに「京報」と言ったわけです。この頃になりますと、人口が2億から4億くらいに増えますから、大変な行政のボリュームです。一日に出る法律も大変多い。京報は毎日出ますが、出ている場所が違いまして、十何軒かで出していた。一番有名なのは、榮禄堂で、最も古い老舗です。そのほかたいてい「報房」という名前をつけております。そういうのが十数軒ありました。これがみんな同じかというと、そうではありません。その頃の新聞屋さんは、内務部（宦官の集まっている所）へ行って、「おい、ちょっと・・・」と言って、きょう出た法律を公布しているのですから秘密ではないのですを写すわけです。たくさんありますから、その中から自分の好きなもの写していく。ですから、十何軒も報房があっても、書かれていることは違う。もちろん重要なのはみな同じですが。たとえば3年に1度の科挙の試験の合格者の名簿は、どの京報も載せていくわけです。「週刊朝日」とか「週刊読売」「サンデー毎日」が東京大学合格者を載せて、カッコして出身高校を書いているのと同じです（笑い）。林則徐の日記を見ますと、発表の日に、彼は福建の人ですから、福建から今年は6人通った、というようなことが書かれています。ですから、合格者の出身地も書いてあったはずです。十数軒もそれがあったというのは、ずいぶん需要があったからだと思います。

清朝が滅びる頃、1910年 辛亥革命は11年ですが、官報が出ます。いろいろな法律や政府の通達を各地に送りますが、すでに電報はありましたけれど、文書がなければ効力を発揮しない。北京で公布された法律が発効するのは、たとえば広東はその20日後、チベットの駐蔵弁事大臣のところでは、165日後にその法律が効力を発する。それまでは前の法律でやってもかまわないわけです。新疆のウルムチは90日後、雲南は60日後、伊犁は120日後です。清朝末期に、日本の官報を模範にしまして、そういうものをつくったわけです。これは20世紀になってからの話です。

日中の鎖国と外国情報

これまでが中国の新聞の生いたちの話ですが、次に

近代における日本と中国の情報への対応の違いについて少し触れます。外国情報は中国はダメなんです。外国に対してインテレストを持っていない。中華思想と一口で言えばいいんですが、自分たちのあいだが本来の世界で、これ以外は大体野蛮人の世界だと思っているわけですから、興味を持ちません。

日本と中国は同じように鎖国をしましたが、鎖国の事情はちょっと違います。日本の場合は、バテレンは大砲などを作れるから、西国の大名が、それとグルになって攻めてくると幕府があぶない。とにかくキリスト教を切り離せ、ということです。政権の存亡を賭けた、キリスト教を行ったわけです。

中国のキリスト教は、ご承知のように典礼問題です。中国では官吏になりますと、孔子廟に行って孔子を拝んで就職する。これが義務になっています。また、中国人は祖先にお線香をあげる。これをイエズス会は許したわけです。キリスト教では、そういうことをしてはいけないわけです。どの孔子廟にも、孔子の位牌とか木像が置いてあります。それに頭を下げる。これは偶像崇拜になるですから、本当はいけない。しかし、それを許さないと中国での布教はできない。日本でも大友宗麟などの大名に取り入ってやったわけですが、やはり、知識階級をつかまえなければいけない。その連中はみんな役人です。役人であるからには孔子の位牌に頭を下げなければいけない。これを許さないと伝道は不可能です。祖先を拝むな、というと大変な反感を買います。ですから、イエズス会はこの2つを許したわけです。これが典礼問題です。

中国のほうはそれで構わないと言っていたら、イエズス会の競争相手のドミニコ会などがローマ法王に向かって、イエズス会は中国で異端のことをしている、孔子の位牌を拝ませている、祖先に対する礼拝を認めていると訴える。結局、ローマでの会議によりまして、イエズス会の措置は悪かった、これはダメだということになります。中国側にも働きかけたりしたり、いろいろなことがありますて、中国の朝廷の首脳連中はもう面倒くさくなり、「もうやめだ。お前らは来るな」ということになった。これが中国におけるキリスト教の禁制なのです。

ですから、同じ鎖国でも事情が違う。日本の場合は、

自分の政権があぶなくなる、というので一生懸命やりましたけれども、中国側はうるさくなって鎖国にした。ですから、同じキリスト教にしましても、中国は非常に緩やかです。面倒くさいということです。キリスト教は禁制になっているのですが、中国の奥地のほうには紅毛碧眼の神父さんがずっといて、周りの人も何も言わない。役人も、へんなことしたらまた問題が起こってうるさい、見てみぬふりをしようということで、ずっとそこにいる。その人が死ぬと、また次の人が来ている、というのですから、日本で磔になったり火あぶりになったり、というのとは様相がまったく違うわけです。

ともかく日本も中国も鎖国したわけです。中国も日本も同じように1つの港、日本は長崎、中国は広州(広東)だけを開いた。貿易相手国は日本はオランダだけですが、中国は国を問いません。しかし、場所は一ヵ所に決めている。

オランダ風説書の果たした役割

大きな違いは次の点です。オランダ船が長崎へ入ると、阿蘭陀風説書といって、世界情勢を書いたものを幕府に持つていかなければいけない。

幕府の閣僚級の人はみなそれを読む。オランダ語で書いてありますから、オランダ語の通訳が訳します。訳した通訳も世界情勢が分かります。老中とかもみんな読んでいます。鎖国の最中に一般の日本人は外国のことを知らなかつたが、上のほうの為政者はみな知っていたわけです。

ところが、中国はそんなものを要求しない。オランダ人は江戸まで来て、献上物をしたりするが、中国は、広東だけで、公式の接触はしないという建て前です。行商と言いまして、中国人の有力な貿易商と接触するだけです。この貿易商は、戸部(中国の大蔵省)の監督下にあります。ですから外国人が広東で何か物を言う場合は、取引先の行商 13人いましたので十三行商と言いますけれども に向かって言う。その行商が戸部に言うという面倒な手続きをとっていた。もちろん、風説書の類のものは一切ない。従つて、中国の清朝の当事者は、外国の事情がまったく分からぬ。

日本の幕府の当事者は知っていた。阿蘭陀風説書は

かなり正確です。ただフランスの革命の時の情報はちょっとおかしい。またオランダとイギリスが戦争をしてオランダが負けた、というようなことは書いていない。しかし、ほぼ正確であるとみていい。日本の政府は、ほぼ正しい世界情勢を、あの260年間ずっとつかんでいるわけです。

初めはスペインとポルトガルの動向を一番気にしていた。あれが反幕府軍を後援しないかと思って、そちらのほうの情報を取りたかったのですけれども、次第にそんなに力はないということが分かってきます。しかし、これが日本のいいところだと思うのですけれども、幕府は「それなら、もういらない」とは言わない。次に自分の興味のあるところに焦点を変えていくわけです。いまヨーロッパはどうなっているのか、ロシアと戦争をしているのではないかとか、当時の日本とあまり関係がないわけですけれども、そういうわざわざ野次馬的な好奇心が旺盛なのです。

中国人はあまり知りたがらない。自分のところにたくさんいろんなことがあるから、そんなロシアまで面倒みきれん、ということがあったと思うのですが、そういうことを知ろうとしない。これが大きな違いになりました。

現在、中国では近代化問題がありまして、日本の明治維新にならえというのですけれども、明治維新だけではない。その前の長い前奏曲があるんですね。中国がそんなものに关心を持たなかった時に、日本では、幕府の幹部はみな世界情勢を知っていた。そういう大きな相違がありました。

医者と天文学者の相違

それからもう一つ。日本でオランダの学問、外国の学問をやっていたのは、お医者さんでした。皆様の中にお医者さんはいらっしゃらないと思いますが、わりに生臭いわけです。有力な患者との話とか、世俗のことなど、いろいろなことを知りたがる。

中国では、欽天監や天文台長が外国人だった時代が長いので、外国の学問をやっているのは、天文暦算(天文学)の連中です。星がどうなったとかこうなったとか、ということをやっていますから、この人たちはあまり世の中のことに関心がない。お医者さんと違いま

して、世俗への関心がほとんどない。世の中どうなってもかまわないんです。そういう人たちが外国の学問をやっていた。

当時の日本の学者は、オランダの医学書を読んでいても、西欧の医学以外のものにも関心を持ちます。ところが天文学をやっている人は、天文暦以外に関心を持たない。いま世界がどうなっているかを知っていても、それを人に言って警鐘、木鐸を鳴らすとか、金鐸を鳴らすというようなことはやらない人たちが、中国では外国の学問をやっていた。日本ではそういうことをやりたがるというと叱られますか、社会的意識の非常に高い人々が、外国の学問をやっていた。こういう違いもあったと思います。

日本では1837年に大塩平八郎の乱が起り、政局がかなり揺れ動くのですけれども、その頃、例の阿蘭陀風説書がきます。アメリカのロバート・モリソン号という船が、マカオにいる7~8人の漂流民を送り届けるが、日本はそれを受け入れたほうがいいと言う。阿蘭陀風説書は、外国の状況を知らせるのですけれども、ちょっとしたアドバイスもするわけです。もちろん、ロバート・モリソン号も、漂流民を渡すことで、何か通商の手がかりを得ようとしたと思うのですが、そういう阿蘭陀風説書の情報が入る。1825年の異国船打ち払い令に基づいて、幕府は阿蘭陀風説書で言ってきたロバート・モリソンが来ても、大砲を撃って追い返すということを決めるわけです。これは大変なことになったと、芳賀市三郎という人が、渡辺華山、高野長英、江川太郎左衛門、川路聖謨というような蘭学をやっていた人たちのグループである、尚歯会へ行って話をします。そのひとたちは蘭学者ですから世界情勢を知っていますので、これは大変なことになる、ロバート・モリソンを殺したらどうなるのだろう、と心配する。

「モリソン号事件」の誤解が悲劇を生む

情報がここで一つ間違っているんです。ロバート・モリソン号という船なのに、これをロバート・モリソンという人間だと思ってしまった。ロバート・モリソンという人は、1834年に死んでいます。彼はマラッカにアングロ・チャイニーズ・アカデミーをつく

りました。ギュツラフとか、イギリスのシノロジストはみなその出身です。最初のイギリスの「中国語辞典」(A Dictionary of the Chinese)も、この人がつくりました。ミルンとの共訳ですが、新旧の聖書を「神天聖書」という名前で翻訳した大変な人物です。そういう大人物であるということは、尚歯会の連中はみな知っているわけです。しかし、この人物が死んだことは知らない。尚歯会に芳賀市三郎が情報を持ち込んだのは1838年です。その4年前にロバート・モリソンは死んでいるのです。

ロバート・モリソンのような人を殺したらえらいことになるぞ、ということで、高野長英が「夢物語」、渡辺華山が「慎機論」を書きます。それが口実となり、蘭学者弾圧の「蛮社の獄」が起こる。渡辺華山は切腹、高野長英は投獄される。その後出獄しますが、最後は自殺をするという悲劇が起こっているのです。

もしもこれがロバート・モリソンでなくてロバート・モリソン号だと分かっていたら、あれほど危機感を持ってやらなかつたのではないか。2人とも助かつたのではないかという気も　あとからのことは分かりませんけれども　いたします。情報が伝わる過程では、どんな間違いがあるか分からぬ。

情報の間違いは正すのが親切

余談になりますが、先日、NHKの放送文化賞をいただきまして、ひとり3~5分挨拶をさせられました。わたしはシルクロードの関係でもらったので、学生時代からスタインとかヘディンの本を読んで憧れていったが、そこへ行けたのは本望だ、それにご褒美をもらうのはちょっと厚かましい気がする、というような話をしました。私はそう言ったつもりなんです。あとでビデオを送ってくるんです。私は、自分の喋ったことをまた聞くのはイヤだから聞こうとしなかったのですが、子供が見ていて、私の耳にも入ってくるんですね。すると「私はスタインやらヘミングウェイを読みましてシルクロードに憧れた」と、こう言っているんです。ヘディンとヘミングウェイを間違っている。あれを見なければ、私は永遠にヘディンと言ったと思っていたわけです。ところが実はヘミングウェイと言っている。他人はなかなか間違ったとは言ってくれない

のですが、間違ったことは指摘してあげたほうが、親切だと思うのです。

これは大変恥ずかしい話なのですが、ある新聞系の週刊誌に連載した小説で、ある人が襲われて全部はぎ取られて、時計も盗られて、失神するわけです。そこまで書いて、私は旅行に出まして、1ヶ月ぐらいして帰ってきて、そこからまた書き足して、その人が気がついて、「あ、おなかすいたな。いま何時だろうと思って時計を見た」というふうに書いたのです。腕時計は盗られているんです。これ、誰も言ってこないんですね。本になりましたが、それでも誰も言ってこないんです。今度は文庫になって、しばらくたっても言ってこないんです。そして文庫が出て3年ぐらいたってから、やっとこのあいだ、非常に熱烈なファンから、「あの人は時計のスペアを持っていたんですか」と、非常に穏やかな指摘がありました(笑い)。あらためて見て、私はそこで初めて気がついて、これは大変なことをしちゃったなあ、と思ったのですが、おそらく気がついた人はたくさんいると思うのです。しかし、気がついてもなかなか言ってくれないんですね。言つてくれれば次で直せるんですけども、もう版も重ねましたし、ずいぶん恥をかいています。間違いは早く指摘してあげたほうが親切だと思います。

ロバート・モリソンの話からそれましたけれども、もしもあの時オランダ人が、これは船の名前だ、ということを強調してくれればよかったです、あんな有名な人ですから、ロバート・モリソンは死んだというのを誰か知っていて、それを彼らに言ってあげればよかつたんじゃないかと思うんです。高野長英や渡辺華山にしても、ロバート・モリソンを守ろうという気持ちから発したことなのですから。ロバート・モリソンを殺したりしたら、国際問題になるということから始まったのですから。

国際法を翻訳させた林則徐

それが1839年のことでして、1840年に阿片戦争が始まります。阿片戦争が始まるまで中国は国際情勢をまるで知らないわけです。あの戦争でも、白旗を掲げてくるのは軍使だということも知らずに、パンパン撃ったりして、イギリス人は怒るんですけども、

怒るほうが無理で、こっちは知らないわけです。

私は林則徐という人物は非常に偉い人だと思います。広東に欽差大使として派遣されて、この人が最初にやったことは、英語のできる中国人の商売人に英語の本を翻訳させることでした。それで自分も勉強しているわけです。

当時、外国人は広東にいるのですが、貿易のシーズンが済むと退去しなければいけない。退去してヨーロッパまで帰って、また来るのは面倒くさいから、ポルトガルの居住区のマカオに留まって、また次の貿易のシーズンに広東に行くわけです。彼らはマカオで、「チャイニーズ・レポジトリ」という雑誌をつくっておりました。

外国人といつても主にイギリス人で東インド会社の連中ですが、これは彼らの中国研究です。お茶はどこのお茶がいいとか、そういうことが書いてあります。そのほか地理書もあります。

林則徐は、そういうのを全部訳させて、自分で勉強しているわけです。彼らから国際法も手に入れまして、パーカーという中国語のできた、医者でもあるアメリカ人宣教師に翻訳させた。

パーカーのところに、林則徐がきたという記録が残っています。ヘルニアはどうしたら治るかということを、聞きにきています。おそらくヘルニアだったと思うんですが……。

診察はしなかったけれど、アドバイスをした。ですから患者のリストに載っている。「林則徐 職業総監」と、こう書いてあります。そして国際法を持って行って、重要なところを訳してくれと言う。パーカーに訳してもらって、林則徐はそれを読んでいます。ですから、林則徐は国際法の重要なところは押さえていますし、外国のことも、一夜漬けかもしれませんけれども、よく勉強した人なのです。

魏源の『海国図志』も長崎へ

彼は阿片戦争の責任を取って、伊犁へ流されます。途中、揚子江の沿岸に寄りまして、そこにいた魏源という人に「いま、世の中はこんなことになっているんだから、きみも勉強しなければいけない」と言って、その資料を全部預けてしまいます。それを元にして魏

源が書いたのが『聖武記』です。清朝の開国以来、チベットとかビルマとの関係や戦争のことなど、外国との問題を論じたもので、膨大なものです。戦争中に日本の興亜院の政務部が翻訳しました。興亜院の一番見事な仕事じゃないかと思います。また魏源は『海国図志』を著しています。これには林則徐が渡した世界地理も入っています。この中で彼は、世界はこういう状況になっているんだ、その中で旧式の蘭学者の夷狄とか、といったような対外観は話にならん、外国のことを全く知らずに、そんなことを言っているのはおかしい、と口を極めて彼らを非難しています。

そのが『海国図志』出たのは1843年だったと思いますが、翌年にはもう長崎に入っています。幕府の老中が『聖武記』と『海国図志』を注文しています。偉い人がいたんですね。個人でも、平戸の老中の葉山左内という人が注文しています。このことは、みんなよく知っているわけです。『海国図志』を平戸の葉山さんが入れたぞ、というので吉田松陰が平戸まで行って読んでいるんですね。

たまたま林則徐という偉い人がいて、その人が非常な危機感を持って、自分が左遷される時に一番信頼していた魏源という人に、それまで集めた資料を預けた。その人が徹夜を重ねて書いた本が、もちろん中国語で書いたのですが、すぐ翌年に日本に入っている。日本に入ったばかりではない。日本で復刻されるんですね。まあ、海賊版ですが、何軒もの本屋がやっているわけです。ですから、これをたくさん的人が読んだわけです。間違いがかなりあるのですけれども、情報に対する熱意は日本では非常に高かった。

私は、好奇心の問題じゃないかと思うんです。何でも知りたいということでなければ、情報がいくらあっても素通りするわけです。「ああ、知りたい、知りたい」という熱意に情報が迎えられる。中国では、今まで情報が流れてくるチャンスはいくらもあったのですけれども、それを求める人がいなかった。外国人は、広東の13人の商売人と交渉していた。彼らを通じていくらでも情報は取れたのですけれども、それをやっている人はいない。そういう形跡は全くありません。政府も、風説書を提出せよ、というようなことは言っていないわけです。この二百数十年の基礎の違い、

ということを考えないといけない。明治維新で日本は急に近代化の基本づくりに成功したのだから、中国も同じことをやればいいということではないんですね。その土台が違うわけです。だから、中国はかなり勉強しなければいけない、と私は思います。

情報で劉邦に敗れた項羽

締めくくりに項羽と劉邦の話をいたします。項羽が劉邦に負けたのも、劉邦の情報のほうが多かったからだ、というのが私の説です。劉邦は沛の田舎の小役人として、秦の始皇帝の時代ですから、村の徴用された人間を連れて阿房宮とか、驪山の陵の造宮に、何べんも行っています。そのため、この間の地理その他をよく知っている。項羽は將軍の子孫でぼんぼんです。会稽のあたりにいてあまり動かないから、世の中を知らない。まあ、年齢の違いもありますけれども。

劉邦は咸陽の都に往復しているあいだに、いろいろな所へ泊まる。ここは人情が悪いとか、ここはいいなとか、戦争の時あそこは冷たいから逃げて行ったらダメだ、こっちへ逃げるべきだ、といったような情報を、彼は非常に豊富に持っていたと思うのです。また、非常に人なつっこい人で、お妾さんもたくさんつくりましたけれども 豊臣秀吉に似ていますが 針を売ったりして、その辺のおかみさんとも話をする。そして「あそこの庄屋さんは冷たい人ですよ。あれは鬼みたいな人です」という類の話を聞くわけです。

情報に通じるというのは、文を読んだりするだけではなくて、ものを知っているということです。読み書きができない人でも、大量の情報を持っている人がいます。運搬に従事している人たちがそうです。中国の運河を往来する船の水夫たち、これはあっちへ行ったり、こっちへ行ったりしておりますから、各地の情報が入る。この人たちはまたネットワークを持っている。よその所へ行くのですから危険なので、そこの親分衆と関係をつけ、向こうの人たちがこちらへきたら保護してやるかわりに、こちらが行ったら保護してもらう。これが「青幫」です。「青幫」とか「紅幫」という組織は、最初は秘密結社でもなんでもないのです。清朝は異民族の政権でしたので、結社は全部禁止した。ですから、結社である限りは秘密結社なのです。この連中は、お

互いに情報の交換をします。本が読めなくても、「あそこは飢饉だぞ」とか「あそこへ行ったってダメだ」とか、物をよく知っている。しかし阿片戦争で、ティサーク号のような速い船が広東から上海へパッと行くようになると、彼らの運搬はもう旧式になって、みんな失業します。この人たちが太平天国の人たちのガイドをしまして、清朝の基礎を揺るがすことになる。そして清朝は滅びてしまう。

運搬業者に滅ぼされた明

ですから、情報を持っている人たち、それから情報網を形成している人たちを失業させるとダメなんです。明の滅亡がその一番典型的な例です。明朝末期の1644年に北京が陥落するのですけれども、その50年前に豊臣秀吉が朝鮮に攻めて行きます。朝鮮は、宗主国である明に援軍を頼みます。宗主国との関係はいまの暴力団に似ています。一応、盃をもらいますが、親分は下の組に内政干渉しない。しかし、その組に何かあれば援助に行くという関係です。明とそれを引き継いだ清も、朝鮮の宗主国になったのですが、朝鮮が「助けてくれ」と言ったのは、豊臣秀吉が攻めて行った時と、日清戦争の時、この2回だけです。

豊臣秀吉が攻めて行く、明が援兵を出す。万暦帝の時代で、万暦というなかなかシブチンの皇帝がありましたけれども、軍費を出さなければいけない。財政が逼迫してくる。経費節約、行政改革をしなければいけない。どこか要らんところはないか。全国に駅站宿場ですね 制度ということがあります。運送とか郵便のために、各所に駅をつくっています。水路は船の駅、陸上は替え馬を置いています。これを政府の経費でやっているのです。政府が、民間の郵便や運送のためにやっている。政府自体は別のルートを持っています。これは要らん、民間のためにやっているのには金は出さん、というのでやめてしまう。一斉に失業します。この運搬業者は、先ほど言ったように各地に連絡がありまして、各地の状況をよく知っています。西安の運搬業者で、駅夫 日本でいえば宿場人足ですが の仲間で指導力のあった李自成が、人を集めて北京へ攻め込み、ついに明の崇禎帝は自殺してしまう。明は清に滅ぼされたのではなくて、李自成に滅ぼされた。

その李自成を清が追放したという形になっています。

このことからしましても、情報がいかに大切な事が分かるわけです。そして情報をたくさん持っている人々を敵に回すと、その政権の運命があぶない。

豊臣秀吉が攻めて行って 50 年後に、そのようにして明が滅びるんですね。太平天国がすんで 50 年後に

清が滅びるので、大体半世紀ですね。情報を持っている人々の大量失業のあと、半世紀後にその政権が滅びる。いまはもう状況が違いますけれども、皆さん方が大量失業しないことをお祈りしまして、私の講演を終わらせていただきます。

文責：編集部